「これであなたもレポートが書ける！“レポート作成の超基本”」誕生秘話

教職教育部　教授　杉浦　健

はじめに

約25年前、大学教員になったときの夢は自分の本を書くことだった。それがこれまでに6冊の本（その他共著多数）を書いている。読書好きだったが、文章を書くことは子どもの頃から苦手で（今でも書くことは苦しい作業である）、ご多分に漏れず、夏休みの宿題でいつも最後に残ったのは読書感想文だった。

長じてからも大学では卒論が書けずに留年、進学した修士課程でも修士論文が不可となり留年、食い扶持を稼ぐために高等学校の国語（文章を書くことが苦手にもかかわらず、国語の教員免許は取っていたのだ）の常勤講師も経験した。そんな私が今や図書館主催の学修サポートセミナーで、「これであなたもレポートが書ける！“レポート作成の超基本”」と銘打ち、文章の書き方を教えている。果たして私に何があったのだろうか（笑）。

私がまかりなりにもこうやって文章を書けるようになり（今でも文章がうまいとは言えない。特に学生のレポートを採点している際に上手な文章を読むと自己嫌悪がある）、レポートの書き方を教えるまでになるには、大きなブレークスルーがあった。そしてそこで理解したことが私が文章を書けるようになったコツになっていて、セミナーではそのことを強調して教えている。今回は文章の書き方を根本的にわかっていなかった私が、ブレークスルーを経験して、上手ではなくとも何とか人にものを伝えるための文章を書けるようになった経緯を示し、この文章を読むみなさんにも、文章が（レポートが）書けるということを感じていただきたいと思っている。

一番大事なのは「伝えたいこと」があること

まず結論からお伝えしよう。文章を書くために何よりも必要なのは、「伝えたいこと」があることである。話すにせよ、文章を書くにせよ、伝えたいことがなければ何を話したらいいのか、何を書いたらいいのかわからない。何を伝えたらいいのかわからなければどう組み立てたらいいのかもわからない。

まずこのことを感じた一つ目のブレークスルーは、定時制高校で国語の教員をした時だ。それまでも塾などで受験国語をそれなりに教えてきたものの、受験のためがなくなった時、国語の授業を何のためにするのかがわからなくなった。受験に出るぞ、覚えておけ、という伝えたいことがなくなってしまったからだ。このままでは教員を続けることができない状態におかれたとき、はじめて自分なりに国語を何のために学ぶのかを考え、授業で伝えたいことを設定して授業を組み立てることで、何とか授業を行うことができるようになった。

次のブレークスルーは、修士論文での失敗だ。私は科学的な方法に基づいて心理学的な事実を明らかにしようとする研究をしていたが、自分がどんな研究をしたらいいのかがわからず（事実をただ明らかにするだけなら、自分がしなくても他の人が明らかにするじゃないかという考えも根底にあり）、テーマが決まらなかったのだ。そんなとき、認知心理学者であった佐伯胖著の『認知科学の方法（東京大学出版会）』にあった「面白い研究をするには」の章を読んで、自分が面白いと思ったことをわかりやすく、検証に基づいて人に伝えることこそが研究だと理解し、研究を進めていけるようになった。結局、研究ですら、

人に伝えたいことが必要だったということを理解したのだ。

問題の元凶は伝えたいことがないのに書かなければいけなかったこと

基本的に私たちは小学生からずっと、文章を書かされてきた。夏休みの読書感想文が最たるものだが、本を読んで感銘を受け、その思いを他の人にも伝えたい、そんな気持ちもないまま、宿題として出され、何を書いたらいいかわからず、解説にあるあらすじで字数を稼ぐ、そんなことをやったのは私だけではないはずだ。もちろんそうやって書いた経験は気づかないうちに文章能力を鍛えていたとは思うが、本当に書きたい、伝えたいと思って文章を書いた経験はほとんどなかった。

私が文章を、さらには論文を書けなかったのは、伝えたいことが特にないにもかかわらず、課題が与えられ、「何か書かなければいけない」状況で、とにかく何かを書くだけだったためだったのだろう。それで結局、字数を埋めるだけの、何を言いたいかわからない、文章しか書けなかったのだ。

伝えたいことを伝える、この文章を書くコツ、もしくは大原則がわかれば、こちらのものである。伝えたいこととは文章のゴールであり、これまではいわばゴールが決まらないまま、走るマラソンのようなものだったのだ。ゴールがわかれば多少の困難はあれ、そちらに向かうだけである。その後は留年して書き直した修士論文も無事書き終わり、博士論文、そして単著出版と、それなりに文章を書くことを仕事にできるようになった。

まずは伝えたいと思うこと

学修セミナーで、レポートの書き方を学びに来る人は、かつての私のように、課題を与えられ、何か書かなければいけない人が大多数であろう。そうであるからには、まずは与えられた題目に対して、自分なりに「伝えたい」、どうしても書きたい、わかってほしいという枠組みに変えるのが第一にやるべきことである。例えば、「ゆとり教育について述べよ」というテーマでレポートを与えられたら、自分はどうしてもゆとり教育について一言述べたい、という枠組みに変えるのである。すると、立場としてはゆとり教育を強く推し進めていきたい、もしくはゆとり教育に強く反対したい、という意見を伝えるだろうし、それをわかってもらうためにその理由をできるだけ説得力を持って伝えるだろう。また反論を見越して、それに対する再反論を記述するかもしれないし、最後にもう一度自分の主張を強調するかもしれない。結局、「伝えたいことを伝えるため」という目的を明確にしただけで、起承転結や対比表現など、国語などで学んできたオーソドックスな文章の表現方法も自然と使えるものになるのである。

大学生になるまでに、いや大学生になってからも、教員は児童・生徒、学生たちに良かれと思って様々な文章を書かせている。しかしながら、その書きたくないのに書かされるという枠組みそれ自体が、もしかしたら彼らの文章表現能力向上を妨げているのかもしれない。教員側はそんな自覚を持ってもよいだろうし、私自身レポートを課すときにはできる限り本人が伝えたいと思えるようなテーマのレポートを設定することを心がけている。

最後にやっぱり言いたかったこと

さてまとめである。しつこいかもしれないが結局言いたかったことはひとつだけ、伝えたいこととそれを伝えたいという強い気持ちがあれば文章は書けるということである。この文章をよんでいるみなさんが、文章を書かなければいけないとき（書かされるとき（苦笑））、そして何よりも人に何かを本当に伝えたいと思ったとき、伝えたいという気持ちを強く持ち、伝えたいことを明確にすれば、あなたもきっと文章が書けるし、もしかしたら本すら書けるかもしれない。これがかつての文章書きの劣等生からのメッセージである。